

富山大学図書館研修会

2012年7月6日

演題：「編集とはどのような仕事か——図書館との関わりにおいて」

最初に私と富山、図書館との関わりについてふれたあと、岩波書店とはどのような会社か簡単な社史と現在の組織について紹介する。次に、編集者の日常の仕事の流れを順をおって説明する。企画の立て方、著者とのやりとり、原稿取得から校正、刊行までの他部・業者との協力、刊行後の反応などをなるべく具体的に語る。そして私が手掛けた本の実物をごらんいただきながらこれまでの仕事の概要をのべ、著者との思い出などにもふれる。また、出版界の最近の動向として、営業や宣伝、出版デジタル機構などについて社内で聞いた範囲内でお話しする。出版にはどんな人が向いているのか、といったことについても語ってみたい。

*「仕事の流れ」についての詳細は、岩波書店のHPトップ→左側「本との出会い相談室」→「本がとどくまで」も参照してください

はじめに

富山と私

図書館と私

本論

編集者の役割

岩波書店とはどんな会社か

私の岩波書店での履歴

*仕事の流れ

企画のアイデアはどうやって得るか

企画の立て方、決まり方（自主企画／著者の持ち込み／第三者からの持ち込み）

翻訳物、講座・シリーズ、単行本

著者とのやりとり（目次案／趣旨／書名決定）

原稿取得のプロセス（草稿／意見／書き直し）

原稿入手から刊行まで（原稿整理／製作・装丁／校正／校了／見本お届け／刊行）

出版契約書

刊行後の反響（新聞・雑誌での紹介・書評）

原本作成（重版での手直し）

重版

手掛けた本と著者

出版界の最近の動向

営業・宣伝

出版デジタル機構

どんな人材が向いているか

富山大学図書館研修会書目一覧

2012年7月6日

1. 出版関連本

- 岩波書店編集部編『カラー版 本ができるまで』（岩波ジュニア新書、2003年）
上神寛・山田益弘編『青木勇の思い出』（非売品、精興社、1985年）
桂川潤『本は物（モノ）である 装丁という仕事』（新曜社、2010年）
斎藤正二『書物と印刷の文化史』（国土社、1982年）
中西秀彦『活字が消えた日 コンピュータと印刷』（晶文社、1994年）
山本栄治『印刷用紙のはなし』（印刷学会出版部、1981年）

2. 林の手掛けた雑誌・書籍（刊行年順）

文学（3点）

79年9月「ロシア革命と現代文学」

80年4・5月「古事記の時代」

岩波新書（13点）

81年：中村雄二郎・山口昌男『知の旅への誘い』

82年：山口昌男『文化人類学への招待』

83年：辻康吾『転換期の中国』

84年：中村雄二郎『術語集』、柴田南雄『グスタフ・マーラー』、芦津丈夫・脇圭平『フルトヴェングラー』

86年：中村歌右衛門・山川静夫『歌右衛門の六十年』、小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』、安藤正士・太田勝洪・辻康吾『文化大革命と現代中国』

87年：三島憲一『ニーチェ』

88年：大江健三郎『新しい文学のために』、戴國輝『台湾』

90年：大江健三郎・武満徹『オペラをつくる』

講座・単行本（8点10冊）

89～90年：岩波講座《現代中国》1・別2（付・内容見本） 装丁＝戸田ツトム

97～98年：岩波講座《歌舞伎・文楽》2（付・内容見本） 装丁＝高麗隆彦

91年：朱建栄『毛沢東の朝鮮戦争』 装丁＝代田奨

91年：国立がんセンター・信濃毎日新聞社『がん治療最前線』正 装丁＝広瀬郁

93年：ホワイティング／岡部達味訳『中国人の日本観』 装丁＝戸田ツトム

96年：巖家祺／辻康吾監訳『文化大革命十年史』上下 装丁＝間村俊一

04年：毛里和子監訳『周恩来キッシンジャー機密会談録』 装丁＝高麗隆彦

10年：安藤正士『現代中国年表』（付・小島書評） 装丁＝高麗隆彦

岩波現代文庫（12点14冊） 旧装丁＝坂口顯、新装丁＝桂川潤&西巻和久

00年：筒井康隆『文学部唯野教授』、小宮豊隆『中村吉右衛門』、川本三郎編『荷風語録』

01年：西嶋定生／李成市編『古代東アジア世界と日本』、若林正丈編『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』

03年：姜尚中『マックス・ウェーバーと近代』

07年：《野坂昭如ルネサンス》3『マリリン・モンロー・ノー・リターン』

09年：新藤兼人『『断腸亭日乗』を読む』

10年：柴田南雄『グスタフ・マーラー』、山口昌男『内田魯庵山脈』上下

11年：犬丸治『市川海老蔵』、バイロン&バック／田畑暁生訳『龍のかぎ爪 康生』上下